

「相互供養相互礼拝」

東京の山手線目黒駅より行人坂といふ坂を下ればホテル目黒雅叙園あり。そのホテルの歴史は古く、東京都有形文化財に指定されたる日本家屋あり。傾斜地に建ちたるその建物の中には正に百段の登り階段ありて通称「百段階段」と呼ばれたり。その階段に続く各和室には著名なる日本画家の描きたる襖絵や格天井あり。鏝^{こてゑ}絵などの絢爛豪華なる装飾の施されし設^{しつら}へもあり。その豪華なる百段階段の各部屋にて、毎年秋の二か月間、四十流派の週替はり交代に出瓶する「いけばな展」開催さる。

2018年秋、「清光の間」には格天井に届かんほどの、赤き実付けたるウインターベリーの木に添へて、ヒバの緑とカサブランカの白の大輪が、筒状の大きな備前焼の花器にいけられたり。「華道高野山」の入り口看板より一步展示部屋に入るなり、皆々息を呑み一瞬立ち竦むなり。「赤と緑と白にてクリスマスの如し」と声をあげし人もあれば、会場案内係の一員なる我は、静かに「さうも見ゆれども、ここは和歌山の高野山、高野山真言宗の華道なるが故に、この赤色の実は不動明王の憤怒の赤と火炎をば想像して製作したるなり」と答ふ。その奥には佛生会の真華あり。佛（又は御大師様）の誕生の歡喜を顕

す華なり。高野山より賜りし樹齡 150 年の高野槇の古木をそのいけばなの中心に据え、その周囲 360 度は五色を彩る花々にて囲ひ、いづくより見ても正面となる如くに球体にいけられたり。そは大日如来の遍満する光輝く宇宙を顕す華なり。この高野槇の姿は長き風雪に耐えたれば枝曲がりて幹は苔むし、えも言はれぬ風情なり。縁ありて、このいけばな展の為に幹を切られ、遠く都会まで運ばれしも、何も変はることなく其処にありけり。喜びなるか、逆に疲れなるかも知らねど、何も語らずに唯々そこに凜と立ち続けるのみなり。見学者の多くは「樹齡 150 年の高野槇なり」との説明を聞くなり息を飲みて立ち止まり、じっと見入りたれども、その古木はそこに唯々悠然と立つのみなり。そのゆるぎなき圧倒的なる存在感に皆は心癒され、しばし内省し始めたるがごとくに、高野山参拝の旅の話や亡き人への思ひ出などを思ひ思ひに我ら会場係に語りながら、次第に優しき笑顔になりゆけり。この真華には如何なる力ぞあるらん。

床の間には大僧正の書かれし「相互供養相互礼拝」の御軸飾られたり。若き母娘来たりて、母親読み方を問ひたれば、「レイハイと読まずしてライハイと読むなり」と我答ふ。母の片袖を掴み、小学一年生なりと言ふ幼子に、この御軸の意は「皆仲良くすること。学校の成

績良き人のみ、駆けっこの速き人のみが素晴らしきにあらず。皆同じく大切な人達なり」と説明せば、少女小さくうなづけり。その母娘、一時間程後に再度入室し、少女はその掛軸を自ら斜めに掛けしポシエットより取り出したる携帯電話にて写真に収めたる後、何を思ふや、しばしの間そこより動かず正座し続けたり。

その御軸の下には小菊をいけたる水盤あり。その菊は強き風雨に耐えたがごとく、茎は横に這ふがごとくに曲がり、花は陽の光を求めて首を上を上げてたる様なり。大僧正であられる華務長先生によりてその様そのまま水盤にいけられたる姿は、高野山真言宗のスローガンたる「生かせいのち」そのままであらんと、思ひなかばに迫りくるものあり。

このいけばな展にて、多くの花に包まれる中、我ら流派のみならず多くの方々が深き安らぎと明日への生きる活力と喜びとを感じたらむと覚ゆ。我も同じ心地になりて、改めて此処にいけられし高野槇の意味を、佛生会の真華の意味を噛み締めたり。大日如来の光はこの虚空をあまねく照らされ、我が心の置き所の何処なるかを導き給ふなり。